
Fate/and blacksmith

コルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate / and blacksmith

【Zコード】

N4086Y

【作者名】

コルク

【あらすじ】

交通事故で死んでしまった彼女は、気がつくと知らない場所に来ていました。

そこで出会う不思議な人たちとともに、日常がのんびりと始まる。

Fate/stay night ニルート全てクリア済みです。Followは年齢の関係でプレイできません。なので、いろいろおかしかつたりすると思いますが、そんな時はぜひご指摘よろしくお願いします。

プロローグ

昔から、生意気な子供だといわれてきた。

相手が少しでもおかしなことを言つと、すぐに揚げ足をとつて反論した。

それがただの冗談でも、そして、それをいつたのが誰だらうとつつかかつていつた。

本当に馬鹿な子供だ。けど、そのときはそれが正しいことなんだと、間違つていることは正されなければならないと、勝手に自分を合理化して、正当化して天狗になつていた。

そんなことをしていたからだろう。周りの人たちもどんどんと減つていった。

はじめは笑つていた友人たちも、一人、一人と姿を消していく。両親さえ、わたしと話すのを嫌がるよつになつた。

それはそうだ。誰だつて、話すたびに口論になるよつなやつと口をきいたりなんかしたくない。

それっておかしくないですか - - - - -

それって辻褄あつてなくないですか - - - - -

あなたのいつてること変じやないですか - - - - -
そしてその都度こんな言い方をしていたのだから、嫌われるのも当然というか。

まあつまりは、いつなつたのも必然だったのだね、といふことだ。

その瞬間を、わたしはぼーと眺めている。

小学生くらいの『わたし』が一人で歩いている。雨が降っているのに、傘も差していない。

たしか、傘がなくなっていたのだ。

一緒にランドセルに入っていたレインコートもなくなってしまっていて、仕方なくタオルを頭にかぶせて帰ったんだ。

この頃は、そんなことが毎日のようにつづいていた。

ものがなくなるのはもちろん、体操服が気づかぬうちにトイレにあつたり、登校してみると机の上がチョークの粉で真っ白だつたり。後から考えてみると、これはやはりいじめの類だつたんじゃないかなと思つけど。

きっとそのときは気づいてなかつたから、一人でひどく惨めな気持ちを噛みしめていた。

『わたし』はぎゅっと顔を噛んで、ぼやける視界を瞬きして何度も消しながら、前だけを見て大股に歩く。
道路の角に、誰かが潜んでいるとは知らずに。
そして、それはやつてくる。

「どーん！」

「つ！」

突然、物陰から数人の小学生が飛び出し、『わたし』を車道に向けて突き飛ばした。

そのまま蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

「ははっ！ おしおきしてやつたぜー！ ……えつ」

幼い顔が凍り付く。

偶然、そこはガードレールのない場所だった。
車道との境目にコンクリートで小さなしきりがしてあるだけの細い道だった。

さらに道路は雨で滑りやすくなっていた。

突き飛ばされた衝撃で車道に押し出された『わたし』は、しきりにひつかかって後ろ向きに倒れ込んだ。

上半身だけがはみ出した形になる。

いてて、と『わたし』が顔をしかめ、ふと横を向いて田を見開いた。

それはどれほど恐怖だったのだらう。

トラックが、まっすぐ自分へ向かってくるというのは。

真っ白で真っ赤な光が、恐ろしい速度で近づいてくるのが見えた。

そしてずっとこの体勢だったなら、間違いなく自分は死ぬだらうと
いうことがわかつた。

けれど、誰一人として動けずに。駆けていた子供たちも、時を止めたように固まってしまって。

・・・つと、目の前が切り替わる。

傍観者だつたはずが、いつの間にか、わたしは『わたし』になつていた。

『すくそ』はく『エ』イトが迎む わたしが『ねたし』はなすなどし ても、どうやらこじつけの終わりは避けられない。

いつだって、わたしは恐怖にとらわれて、この瞬間から指一本動かすことさえできやしないのだ。

どん、という音がして、視界が真っ赤になって、そこで終わり。 ブラックアウト。

わたしの記憶が高速で巻き戻されていく。

歪みきつた顔の自分。

と、自分の死の瞬間を追体験し続いている。

死んだな」と、とある世は、ても連れて行けはいいんだ。わたし
が罰を受けるべきだといつなり、石積みでもなんでもするから。
だから、う。

「うう、こんなところで何してんだ？」

「え？」

不意に、首根っこを掴まれた。

驚いて振り向くと、そこには不思議な男の人が立っていた。

黒髪に、褪せた赤い布を適当に巻き、褐色の肌の上にはのたくるようにして奇妙な模様が描かれている。

「……というか。ここには、わたし以外いないはずなんだけど。ぽかんとして見上げると、彼は眉を顰めてわたしをにらんだ。

「んー？お前、人間か。つかしいな、ほんと何でこんなところにいるんだ？迷子なんて嫌だからな、俺」

「ま、ま、迷子？えと、違う」

「違う？じゃあどうやって来たんだ。そんななりで、本当は超凄い魔術師だつたりするわけ」

まじゅつし？

「なに、それ」

「…………」

「え？な、なに？」

彼は半眼になつて黙り込んだ。

呆れてこようにも見えるし、怒つてこようにも見える。

「……まじで？知らねえの？」

「うん」

「…………はー。嘘だろ……」

額に手を当てて唸り出す。ため息をつき、じとーっとわたしを見やる。

「……消滅させるかあ？それもそれでもまずいか。けど、ああー……

・・・

ひとしきりつづんづん唸つたあとで、彼は何かを思つたようではぱ

んと両方の手のひらを打ち合せた。

「お、そうだ！」

「なに？」

「いいこと思いついた。あにつんとに押しつければいいじゃんあいつ？」

「あいつって？ ていうか、押しつけるって」

「細かいことは気にすんな。そーだよ、あいつ一応正義の味方なんだから人間一人くらいどうってことねえよな、うん。

な、俺天才？」

「え、知らない」

「ノリという言葉を知るがいい。そんじゃ送るぞー」

「はつ！？ 待つて、訳わかんない」

何なんだこの超展開！ 頭がついていかないって！
混乱して、思わず彼の腰布にがつしどつかまる。
わたしを見下ろして、なぜだか彼は苦笑したようだった。

「・・・俺にすがるか。無知つていつのはすげえよな」

「？」

「いーや、何でも。けど、そうだな。お前を押しつける相手は悪いやつじゃないから、安心していいと思つぜ。」

むしろ、スッゴイお人好し。超がつくくらい」

「そ、そうじゃなくて」

「人間がここにいちゃまずいんだよ。精神がとけちまつ。後始末すんの俺だから、とつとと出てつてもらいたいの。時間がたちすぎる手遅れになるからな」

「精神が、とける？」

それは、いつたいどうこうことなんだろう。

脳みそがなくなつてしまつということなんだろ？ それなら、こ

の男の人も危ないんじゃないのか。

「俺はいーの。それより、そら、道は造った。あっちに向かって行けばいい」

「え・・・？」

彼が指した方を見ると、確かに明るい光が見えた。
さつきまで真つ暗だったはずなのに、いつの間にそれはあったのか。

「ほり、いけって

どんと背中を押され、わたしはたたらを踏んだ。
どうやら、考える時間もくれないらしい。
でも、一つだけ聞きたいことができたのだ。

「あ、あの、や」

「あ？」

光に飲み込まれる寸前で足を止めて、ふりかえる。
彼はすでに一仕事終わつたといわんばかりにくつろいでいた。
いいけど、へそのじまは取らない方がいいと思う。おなかが痛くなるし。

「あなたの名前、なに？」

「あー？ そんなの、どうだつていいだろ」

「聞いておきたくて

「ふーん・・・」

彼はふうっと指先についたかすを吹き飛ばして、すこしづかり考え込むそぶつを見せた。

そして、人の悪わうな笑みを浮かべてこういった。

「俺は、そう、アヴァンジャーかな。お前面白いから、いつでも死にたくなつたら呼ぶとい!」

すぐ駆けつけてやる

「なにそれこわい」

「はいはい、これで気が済んだか?」

「うん。ありがとう、アヴァンジャー」

ひらひらと手を振る彼から目を離して、目の前の光に向き直る。
そしてわたしは、一歩踏み出した。

プロローグ（後書き）

初めて「じひこ」のを書いたので、お見苦しこ点があつたと感
います。

違和感や、「じひこ」の使い方はおかしいんじやないですか?と
いうことがあつたら、ぜひコメントしてください。

わたしの家族を紹介します

新しい家族ができる、三年になった。

といつても、できたところのは語弊があるのだけれど。できたところの言葉は、わたしの両親に「わふわわしい」のだろう。

「「」せんよー。降りてらっしゃい」

「あ、はあいー。」

一階から両さんの声がした。

ぱたぱたと階段をかけお・・・ととと、危ない。三歳児の短い手足では、階段を駆け下りるなんて清水の舞台からひものつかないバンジージャンプをするようなものだ。一段が身長の半分くらいあるので、怖くて仕方がない。

「だいじょ「うぶ、てつ」

わたしの兄の士郎が心配そうに声をかけてきた。

同じよつこじわごわ階段を一段ずつ降りながら、ふとこ眉毛をへこよつとやげる。

わたしはあわてて頭を振った。

「だいじょ「うぶー兄さんはだいじょ「うぶ?」

「だ、だいじょ「つぶだよ。ほく三木だし」

そしてまたそろそろと次の段に足をのばした。

た。あ、落ちる。
つて、うわあー！

ぎゅっと目を瞑る士郎。手足も縮めて、まるでだんご虫のようだ。わたしは反射的に手を伸ばしかけて、はたと士郎の後ろにいる人影に気づいた。

「あー、お、お父さんー。」

ぼすつと重い音を立てて士郎がその人の腕の中におさまる。
筋肉質でよく笑うそのひとは、わたしと士郎のお父さんだ。
彼は士郎を左脇に抱え直して、わたしに向かつて手を差し出した。

「よし、鉄子も来いっ！」
「はーい！」

わたしはお言葉に甘えて、父さんくと黙こつと kiridaiブした。

わたしは、気づいたときにはこの家で暮らしていた。
わたしの名前は鉄子。三歳だ。
たぶん、これがあのアヴォンジャーが言っていた、『押しつける』
ということなんだと思つ。
どこかの家に新しく生まれ直す。つまり、わたしをその家に押しつ
ける。

「・・・ひどい」

「あ、にんじん美味しくなかつた?」

「え? あ、ううん、おいしいよ! このにんじんあまいし!」

「そう、良かった。煮るときにちょっとはちみつ使ってみたのよ」

優しく微笑む、このひどがわたしのお母さん。

家事が好きで、料理が好きで、とても優しい白髪のお母さんだ。

ただいかんせん、ちょっと暴力的なところがあるのが欠点だ。まあ
些細なことだけど。

前とは違つお母さんを『お母さん』と呼ぶのももう慣れた。最初は
違和感があつたけど、今はそれでもない。

あの暗闇の中で長時間過ごしたせいだろうか。家族の記憶も、ほか
の人たちの記憶もぼつかり穴が開いたみたいになつて、思い出すこ
とができなくなつていた。

せつこえば、今のわたしの見かけも前とは全く違うものだ。
赤毛に金色がかつた茶色の目。兄の士郎とそっくりの色。
ちなみに、母さんもこんな感じ。わたしの家で唯一日本人らしきの
は父さんだけだ。

「ん? どうかしたか、鉄子」

「なんでもない」

父さんは鉄鋼関係の工場で働いていて、毎日とてもくわくなつて帰
つてくる。

夕方「ただいま」と帰ってきてすぐに布団に倒れ込むとするの
を、家族みんなで風呂にたたき込むのが、我が家の中課だ。
気さくで、むきむきで、よくこちらなどいつも連れて行つてくれる、
頼れるお父さん。

お母さんに内緒で、スナックだの居酒屋だのに連れてつてもうつ
いるのは、父さんとわたし達だけの秘密。
そして、最後。

「（）そ（）」

「・・・にんじさんと食べなきゃだめだよ

「（）・・・むづづ」

わたしの横でにんじんだけ残つた皿をつつき回してるのが、兄の
士郎だ。

三歳にしてはよくできた兄で、妹のわたしを気遣ってくれるし、誰
かをいじめたり、ものを取つたりということもほとんどない。
気弱つていつちやつたらおしまいだけ。でも、とてもいい子だ。

「・・・ねえ、てつはブロッコリーたべないの?」

「むぐー。」

不意打ちが来てのびがつまた。
胸をタップするわたしを見て、士郎がわたわと水を差しだしてく
れた。

・・・んぐぐ。

「・・・ふー。ありがとう」

「ううん、いこよ。ねえ、もしかして、うつうでプロシ ロコー苦
手なんじやない?」

「うぐう」

言葉に詰まる。

そう、実はわたしはあの緑色の、もともとをした、わたしの田の前に
マヨネーズとともに転がっている、プロシ ロコーと呼ばれるキャベ
ツの変種が苦手である。

いや、なぜかつてそんな・・・むしろ食べられるとこう方が不思議
とこつか、あんなの食べてのびに詰まつて死んでも知らないよ?と
いう感じというか。

そもそも、もともとだけならまだいいんだ。味がないから。なんで
茎があるんだ?なんでもさむさのあとに野菜くさいのがくるんだ。
もさしゃきり、みたいな、あのギャップ!初めて食べたときの感覚
を、わたしは今でも忘れない。

ええと泣き叫んだあのとき。あのぐしゃっとした食感・・・。

「うつ?聞いてる?」

「へっ?あ、う、うん、聞こへるよー。」

はつとして士郎に向き直る。

士郎がにこりと微笑んだ。

「ブロッコリー、ぼくが食べてあげる。かわりにぼくのこんじん食べてくれない?」

「なぬ・・・!」「こちん・なんといつ策士!」

「ふふん、のこしたらおかあさんのがこわいもんね。すべしってなに?」

得意げに胸を張る士郎。

わたしは笑つて、ちりつと向かいの両親に手をやつた。

・・・お母さんは、とくべの昔に氣づいているけれど、見て見ぬふりをしてくれてこる。

父さんも、こいつはいつも見つめっこる。

わたしが詰つた。

「じゃあ、ブロッコリーと交換ね」

「うふ。じゃ、こらじんあげる」

フォークを互いの目にのばして、そのままぱくっと口にさくる。何かが呑くよくな音がして向かこを見ると、お母さんが両手を合わせていた。

「一人とも、残さず食べたわね。」ちやんとするわよ

「ちよ、ちよと待つてくれよ。まだ俺食べ終わってないぞ」

「もひ、わからんやしだからでしょ? せやべ食べなさい」

い

あわてて「飯をかき」む父さん。

それを呆れた顔で見てくるお母さん。

そしてきょとんとしてくる士郎。

わたしは、嬉しくなつて笑つた。

この家族が大好きだ。だから、前とは違う、素直ないい子になつて喜ばせたいと、そう思った。

わたしの家族を紹介します（後書き）

短かつたですね・・・すみません。短いくせにぐだぐだしています。
もし良かったら、コメントや評価お願いします。

わたしは一人で商店街に来ていた。

お母さんからおつかいを頼まれたのだ。

といつても、三歳児に頼むのだから、ちょっとしたものだけだ。
手に持つた紙を見て読み上げる。

「ええと、牛肉、にんじん、たまねぎ、じゃがいも。・・・今日は
カレーかな？」

ふふ、と思わず頬がゆるむ。

お母さんが作るカレーは、本当に美味しい。自家製で、スパイスから自分で調合して作るから、お母さんにしか作れない世界で唯一、
そして世界で一番美味しいカレーだ。

カレー、カレー。そういうえば、カレーってはじめは辛くなかったって
本当だろ？

「カレー、カレー、ふふーん。カレー、カレー、ららー」

カレーの歌を歌いながらスーパーへむかう。
肉屋さんやハ百屋さんもあるにはあるけど、子供の足では遠くてな
かなかいきづらいのだ。

三歳児の歩幅は、想像以上にちいさかった。

「ふう、やつとついた。つかれたー」

そびえ立つ自動ドアを前にして、よいしょと買い物袋を抱え直す。

「反応してくれないんじゃない」など少し不安になつたが、そんなことではなく、普通に通り過ぎることができた。

よし、それじゃあまず、牛肉からかな。

「ええと、なまこべのパートナーはどうなんだろ？」

あちこち見渡してみると、ピンク色のパックが並べてあるパートナーを見つけた。
ピンク色というのはもちろん、中身のことはだ。

田線が低くてよく見えないけど、あそこだらうと覗き口をつけててくてくと歩き出す。

・・・・ひゃあ、せひぱぱつ供つてこりは不便だ。

「う

「あい、じめんな

なぜかって、周りがよく見えないし、周りにも見てもられないし。
小さすぎて気づかないようだ。くわう。
わたしの身長は同じくらこの子供と比べても低いので、仕方がないのかもしれないけど。

苦労して人の波をぐぐりぬけ、陳列棚までたどりつく。
こりは割と低めなので、特に背伸びしたりすることもなく中を見ることができた。

「牛肉、これでいいのかな。んっしょつと

ぽいっと買い物袋に投げ入れ、次は、とメモを見る。
にんじんか。

士郎はにんじんが嫌いだけど、カレーに入ってるのなら食べねー」とができるんだ。

つまつそのくらこお母さんのカレーはおいしい、ところが「なんだ。へへ、ただの血慢です。

「にんじんにんじん……あ、あつた

首を巡らすと、木箱の上に山と積まれたにんじんを発見した。ぐらぐらしてて、今にも崩れそうで怖い。

ところが。

「ど、どどかない……」

頂点が高すぎて全然手が届かない。

背伸びしても、はねても、とんでも、手が届かない。そして、はねたり飛んだりするたびに揺れるにんじんの山がとても怖い。

面前の忙しい時間帯。

店員さんは皆レジに出払っていて、呼ぶわけにもいかないし、せりふが迷つてこんど、

隣でたつと音がした。

「え？」

「つと。はい、これ。これがほしかったんでしょ？」

黒髪の少女が、田の前でにんじんを差し出していく。

状況がよくわからない。

とりあえずにんじんを受け取り、ぺこりと頭を下げる。

「ありがとう、」この少女がにさんじんを取りてくれたよつだ。

「ありがとう、」

「おれいなんていいわ。わたしだって、下心があつてたすけたんだ
もの、」

「した、うるさい……？」

なにか、頼みたことでもあるのだろうか。
わたしこれできることなんて、あんまりなこと思つた。
首をひねると、少女はじつとこちらを見ながらじつた。
「あなた、このくそのがよくな。花屋を探してるんだが、どこか
しらない？」

はじめてのおつかい 遭遇編（後書き）

毎回ぐだぐだで、申し訳ないです。

終わり方も微妙ですし……もつと勉強して、文章つまくなりたいですね。

もし良かつたら、評価、感想、よろしくお願ひします。

少女の言つたことの意味がいまいち理解できず、首をかしげる。

「花なら、スーパーにもあるよ。わたしにたのまなくても……」「事情ははなすわ。とりあえず、買い物はそれで全部?」

それ、と指さされたのは牛肉とんじんが入った買い物袋。首を振ると、少女はこくりとうなずいた。

「手伝うわ。メモを見せて」

そしてメモを受け取ると、一人でせりと歩いて行ってしまった。ぽけっとそれを見送つて、

「……あれ?」

少しの間頭が空っぽになつていたことに気づいて、さつきとは反対の方向に首をかしげた。

あの少女は買い物を手伝ってくれると言つた。

なぜかつて、彼女は花がほしかったから。

それで、なんでわたしなのって聞いて、ええと、それから……。

「なにやつてゐるの？まだたまねぎとじやがいも、買わなくちゃいけないんでしょ？」

いつの間にか彼女が戻つてきていた。

田の前で「王立ち。

「まつたぐ、ぼーっとしないでよ」

口をとがらせて、そんなことを言つてくる。

・・・悪い子じやなさそうだ。

せつかく手伝つと言つてくれてるんだし、花を探すのを手伝つてあげてもかまわないだろ？

「うん、『めんね。それじや、歩きながらはなそ』
「そうね。たまねぎはあつちよ」

木箱の向かい側を指さして、やつぱり一人で歩き出す。あわてて追いかけ、後ろ姿に向かつて話しかけてみた。

「それで、探してゐる花つて、なんていつの？？」

「クレマチスよ」

「くれ・・・まちすつ？」

そんな花、聞いたこともない。

「どんな花なの？」
「私も知らないの」

「えつ？じゃあ、どうやってさがすつもりだったの」「花屋でお店の人には聞けばいいっておもつてたの。まさかないなんて、予想してなかつたわ」

積み上げられた木箱を小刻みに揺らし、落ちてきたたまねぎをナイスクヤツチしながら、少女はむつと眉根を寄せた。たまねぎを受け取りつつ、クレマチスとかいう花のことを考える。そんな園芸種だか花束用だかも分からぬようなマイナーな花が、スーパーにおいてあるはずがない。

少女も、一度聞いてみて擊沈してしまつたんだろう。となると、専門の花屋さんに行くしかないわけだけど。むむ。

「あ、そうだ。忘れてた」

突然、少女が振り返つた。
きれいな黒髪がぱつと揺れる。

「あなたの名前を聞くの、忘れてたわ。私は遠坂凜。あなたは？」
「今更だ！あー、えと、わたしは鉄子」
「てつこ・・・ありがと、分かった。私のことは、凜つて呼んでくれていいからね。てつこ」
「わかった。ごうじんなんだね、凜は」

用は済んだとばかりにじゅがいも「一ナーハと歩き去つていく背中が変に凜々しい。
わたしはため息をついてその後についていった。
呼び捨てはあんまり好きじゃないんだけどな・・・。

「お母さまが珍しくお花でも買いに行こうかしら、なんて言つから、じゃあ私が行つてきます！つて出てきちゃつたけど・・・早まつた

かもしだいわね

「え？ なに？」

ぼそぼそと呟くが、よくきこえなくて聞き返す。

凛は少し黙り込んだ。

そして、ゆっくりと口を開く。

「・・・私のお母さまね、体が弱いの。いつも家の中で家事をしてばかりで。料理するだけでもまいがするよつなひとだから。そんなお母さまが昨日、花を買いに行きましたの。外出なんて、自分からは滅多にしたがらないの」「・・・・・」

「今朝、やつぱり体調を崩してね。だから私が代わりに来たの。お母さまの役に立ちたかったし・・・けど、だめね。これだったら、お母さまがよくなるのを待つたほうがよかつたかもしだいわ」

さつきまでの、むつとした気持ちが消えていく。

強引なのは嫌いだ。なぜかって、昔のわたしがそうだったから。でも、彼女の強引さは、強がりなのかもしれないと思つた。いま、少しだけ出してくれた弱さが彼女の本当なのだ。お母さんのために何かしたくて、けどうまくいかなくて。でも誰かに頼むのはプライドが許せなくて。

そして見つけたのが、同じように困っていたわたしだったのだ。

「そつか。なら、がんばってさがせなきや」

「は？ 何言つてるの？」

「お母さんを喜ばせたいんじゃないの？」

「う・・・・」

頬を赤らめて顔を背ける。

それをじっと見つめていると、凛はいきなりガツとわたしのあごを掴んで無理矢理視線の向きを変えさせた。

「いたいでふ」

「う、うるさい！いいからはやく買い物を終わらせて、花を探すわよー。」

そのままわたしの手をひとつかみ、じゃがいもへと引っ張っていく。なんでだろう、顔が赤いけど。

・・・そういうば。

「凛は、スーパーのむかいの花屋には行つた？」

「向かいの花屋？そんなものなかつたわよ」

「え？ そんなはず・・・」

まさかとは思つねど、凛はもしかして、あの花屋を見落としているんじゃないだろ？

いや、そんなまさか。

はは、もしかしたら、なくなつちゃつたのかもしれないし、数分の間に！

そんな訳ないね。

案の定、花屋を見落としていたようだ。

「えーーー！ なんの、わざも見たときせなかつたわよー。」

そんなわけない。

唸る凛に苦笑いを返して、わたしはエプロンを着けた店員さんに話しかけた。

「すみません」

「お？ なんだい、おつかいかい？」

「うん、そりなんだ。クレマチスってありますか？」

「クレマチスかい、ちょっとまってなさいよ」

店員さんがひょいと引っ込んで、植木鉢のあたりを「んんん」とあざり出す。

そりして出てきたのは、きれいな紫色の、風車みたいな形をした花だった。

「ほい、これだ」

「わあ、きれいだね」

「値段はいくらくなの？」

見とれるわたしをよそに、凛が单刀直入に尋ねた。

店員さんが植木鉢の下をのぞいて呟つ。

「んー、千六百円だな」

「せんつ・・・・だ、だいじょ「ふふ、凛ー」

千六百円なんて、わたしからしてみるとものすごい大金だ。
不安になつて凛を見ると、財布から一万円札を出していふといふだ
つた。

「ぶ・・・・・」

「それ、六株かよ？　だい。」これで貰えるだけ買つてこいつでいわれ
てるの」

「おお、じゃ、これはおつりだ。ちよろまかすんじゃねえぞ」

「そんなことしないわよ。馬鹿じやないの？」

凛は小銭を洒落た真つ赤な財布に押し込むと、ぱさつと髪をかき上
げた。

その仕草がきつちりと似合つていて見とれそうになる。

彼女は植木鉢が入つた袋を一つ受け取つて、わたしを見て不思議そ
うな顔をした。

「何やつてるの？」

「へ？　なにって」

思わず、ぱーっとしてただけなんだけど。

そんなわたしに、凛は袋を四つ押しつけてきた。

「ほひ、あんたが持つのよ。手伝つてくれるつて約束でしょ

「ええつ！　でも、買い物袋持つてるし」

「わたしはもう両手ふさがつてゐるし。あんたはまだ両手あつてゐるじ
やない」

「なんだつてー！？」

片手で植木鉢を四つも持てとおっしゃいますか！なんてあくまで！

そういうしていぬうちに、全部片手に持たされてします。

「重いよ。重いよー」

「私の家まででいいから、おつかい手伝つてあけたんだから、おあいこじやない？」

ふふんと笑う凛。

何を書っても無駄だと氣ついで、わたしは肩を落とした。

颯爽と歩き出した凛を追つて、わたしは重い一步を踏み出した。

遅くなつてすみません。

あいかわらず短くてぐだぐだです。改善していきたいです。
もし良かつたら、評価、感想、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4086y/>

Fate/and blacksmith

2011年11月23日18時46分発行